

# 『ロシアにおける居酒屋の歴史』の作者 イヴァン・プリージョフに関するロシア語文献概観

下 里 俊 行\*

(平成8年10月31日受理)

## 要 旨

本稿は、1868年にヴォリフ出版社が出した『ロシアにおける居酒屋の歴史』の作者イヴァン・ガヴリロヴィチ・プリージョフに関するロシア語文献を比較的網羅的に概観した研究ノートである。彼の著作は、1990年代に相次いで復刻されるようになったが、彼に関する回想的記述、研究論文等の概観はまだ十分になされていない。従来、彼は、主としてネチャーエフ派あるいはドストエフスキイの作品『悪霊』の登場人物のモデルとされてきたが、彼に関する記述をできるだけ幅広い視野から見通すことにより、プリージョフの文献の多面性を浮き彫りにした。

## KEY WORDS

tavern	居酒屋	bibliography	書誌学	history	歴史
russia	ロシア	Ivan Pryzhov	イヴァン・プリージョフ		

## 1. はじめに

「ソ連邦」崩壊を前後する1990年代初頭以降、独立国家となるロシアの各地で様々な分野で1917年革命前の時代への復古主義的な潮流が目につくようになった。合い言葉は「復元」(レスタブラーツィヤ)である。この「復元」とは、過去のありのままの再現ではなく、今に生きる人々にとって直前の過去を否定するための一種の「変革」あるいは「革新」というような意味あいをもっている。「復元」それ自体が新しい意味や価値の創造になっているのである。歴史的な建造物の「復元」とちがって、文献上の遺産の「復元」は、比較的容易であり実際にめざましい勢いで進んでいる。個々の作品は確かに存在していたが、実際にそれを読もうとしても、作品それ自体が知られていなかったり、知られていても図書館などで閲覧を許されなかったものが膨大にあった。そのような作品の復刻は、多くの読者から見れば全く新しい作品の登場ということになる。ポスト・ソビエト時代のそのような復刻本の一つが、イヴァン・プリージョフ著『ロシアにおける居酒屋の歴史』(初版は1868年、以下『居酒屋の歴史』と略す)である。まず題名からして面白そうなテーマである。ドストエフスキイの小説やギリャロフスキイのルポルタージュに出てくる地下室のいかかわしい酒場をほうふつとさせてくれるものがある。この本の内容は、法令集や古文書、回想といった文献資料だけでなく作者プリージョフ自身の聞き取り調査を踏まえた、古代から19世紀半ばまでのロシアの酒販売にまつわる歴史の概観であ

---

\* 社会系教育講座

る。本稿の目的は、同書の作者にかんするロシア語文献を概観することである。

## 2. 作者プリージョフの生涯

プリージョフの伝記的事実にかんしては日本では、中村喜和氏をはじめ、鈴木淳一氏などのいくつかの研究がある<sup>1)</sup>。まずはじめに、これらの日本での研究やまたソ連での研究およびプリージョフ自身の自伝にもとづいて彼の生涯をまとめてみることにする。

ロシア人の男性であるイヴァン・プリージョフは、1827年9月22日（以下、旧暦による）に父の勤務先のモスクワ・マリヤ皇后庁慈善病院で生まれた。父ガヴリイル・ザハロヴィチは、1793年生まれで、モスクワ郊外のセロドニコヴォ村出身の自由解放農民であった。彼は、読み書きができたため1812～14年の対ナポレオン戦争に従軍し、15年から慈善病院の守衛に採用され、17年から同病院の書記になる。56年に精勤の功勞により貴族の称号を授与され、58年に65歳でなくなる。他方、彼の母親の名前・生没年は不明である。弟は1834年生まれで画学生となり、のちに建築家になったといわれている。イヴァンの妻オリガ・グリゴリエヴナ（旧姓マルトス）はウクライナ人で60年代前半頃結婚したようである。イヴァンは、1848年にモスクワ第1ギムナジヤを卒業し、試験なしの大学入学資格を与えられた。同年モスクワ大学に進学することになるが、本人が文学部を志望していたにもかかわらず、ヨーロッパでの革命の影響を危惧した政府の出身身分による制限策により、やむなく医学部に在籍した。しかし在学中はもっぱら文学部・法学部の講義に出席し、結局1850年10月30日に退学処分となる。52年1月18日よりモスクワ民事裁判所の会計検査官および記録係を兼任するかたちで最下級の14等文官として勤務をはじめ。月給は当初、14ルーブル、のちに23ルーブルであったという。彼は、月給の他に『モスクワ報知』『ペテルブルグ報知』『現代の言葉』『われらの時代』『娯楽』『モスクワ新聞』『文学雑記』『ヨーロッパ通報』などの新聞・雑誌に投稿し、『声』誌では書評欄を担当するなどして稿料を稼ぐとともに「作家」としての地位を固めていった。また60年代初頭にはモスクワの貴族会議の選挙に立候補しているが落選した。勤務の合間にはモスクワ郊外の農村や労働者街で民衆生活にかんする聞き取り調査をおこなうとともに給与のほとんどを歴史関係の文献購入にあてている。こうした研究は『聖なるルーシの乞食』（1861年）、『モスクワの26人の偽-予言者・偽-瘋癲行者・馬鹿女と馬鹿男たち』（1865年）などの著作へと結実する。このころプリージョフは、民衆生活の歴史を研究するために次の6つのテーマを設定したと自ら述べている。1) 民衆の信仰（原始文化、中世、現代）、2) 社会風俗（パンと酒、共同体と同胞団、詩・音楽・演劇）、3) ロシア人女性の歴史、4) ロシアにおける乞食の歴史、5) セクト・異端・分離派、6) 小ロシア。ここから彼の「民衆生活」への視点がある程度伺い知ることができる。ところが67年の政府の司法改革の結果、勤務先が閉鎖されることになり彼は一転、失業者となる。借金生活から抜け出るため彼は67年末に民間の鉄道会社に就職するが、仕事になじまず、すぐに辞職している。68年4月には今度はオリョール・キエフ・ハリコフ・ヴィチェヴスク鉄道線の線路監視員として雇われるが長続きはしなかった。その間、彼は、67年にヴォリフ出版社に『居酒屋の歴史』の原稿を「売却」し、それは翌年出版された。その後、彼は定職に就くことを断念し、ソコロニチエ原の市場でパンを仕入れ、それをモスクワの場末の労働者街で小売りすることで生計を立てるようになった。売り上げは日に50銀コペイカであったという。ち

なみに66年頃のパン一斤の仕入れ価格は12コペイカという記録がある<sup>2)</sup>。生活費の足しにしようと蔵書の売却を考えたプリージョフは、チェルケソフ書店の店員たちと知り合いになるが、彼らはネチャーエフの組織の活動家たちであった。プリージョフは、68年にネチャーエフと知り合い、組織に参加する。そこで学生イヴァノフ殺害に関与し12月に逮捕された。70年にペトロ・パヴロ要塞監獄に移送され、そこで裁判での弁護用に自伝的メモ『告白』を執筆する。71年に裁判で苦役12年、シベリアへの終身流刑の判決を受け、72年にヴィリノ苦役監獄、その後イルクーツク監獄村、さらにザバイカルのペトロフスキイ鉄冶金工場で苦役に従事した。81年に苦役の年限を終え、同地に流刑者として定住する。この頃からプリージョフは再びフィールド・ワークをシベリアの住民のなかではじめ、旧教徒やデカプリストたちについての論文を執筆しはじめた。83/84年頃に流刑地まで同伴した妻を亡して数年後、彼は85年7月27日に58年間の人生を終えた。

### 3. プリージョフにかんする回想と調査・研究の歴史

プリージョフは、『居酒屋の歴史』など民衆の生活史研究のための第一級の業績を残したといわれている。帝政末期のもっとも権威ある百科事典とされる『ブロックハウス・エフロン百科事典』では、第26巻の「居酒屋」の項目で『居酒屋の歴史』が、第41巻の「乞食」の項目では『聖なるルーシの乞食』が参考文献として挙げられている。また1898年に出た第50巻には彼自身についての項目があり「歴史家」として紹介されている。

1908年になると雑誌『過ぎ去りし年月』2月号に、女性作家ヒンの手紙とともに先述のプリージョフの手稿『告白』が全文掲載された。この手稿を保管していたのは、プリージョフの旧友でシェークスピア研究者として名高いモスクワ大学教授ストロジェンコ（1836～1906）であった。彼は亡くなる直前にプリージョフの書簡と『告白』をヒンに手渡し「これをつかって小説でも戯曲でも好きなものを書いてくれ。ただ哀れなわがプリージョフが何の痕跡もなく深い淵に沈んでしまうことがないようにしてほしい」と語ったという。彼女は、手稿をそのままの形で公刊することが重要だと考え雑誌編集部に寄せたのである（Альтман, 1934: 5-6）。

1913年になるとカザンの「若い力」社により『聖なるルーシの乞食』第2版が、さらに14年に『居酒屋の歴史』第2版が出版された。いずれも同社の「歴史文庫」シリーズのひとつである。それぞれの発行部数は不明だが、前者は50コペイカ、後者は2ルーブルであった。

『聖なるルーシの乞食』第2版には発行者イヴァン・コチェルギンの序文「プリージョフの記憶」が付されていた。当時「若い力」社は、ツルゲーネフの『未公刊著作集』（12コペイカ）、ドブロリューボフの『オブローモフ主義とは何か』（5コペイカ）やコチェルギン自身が執筆した中等学校用教科書類（『文法用教科書』5コペイカ、『詳解ロシア語・ロシア文学』15コペイカ）などの廉価本を出版販売するとともに、「歴史文庫」シリーズとして、アフナーシェフ編『ロシア伝説集』（1ルーブル50コペイカ）など高価であるとはいえ歴史的価値の高い書籍も出していた。

これらのことは『居酒屋の歴史』第2版（Прыжов, 1914）の巻末の出版目録からわかったことだが、そこには同社の他の出版物についての書評も転載されている。

例えば『歴史通報』（1913年7月号）掲載の『聖なるルーシの乞食』への書評では「プリージョ

フの本はひじょうに分かりやすく、しかもたいへん面白い。著者はもっとも卑しい下層民衆、つまり《どん底》そのものを描いているのだが、それでもやはり彼の民衆への愛、民衆への信頼、そしてまさに民衆のなかにこそロシアの未来があるのだという期待を感じさせてくれる」とある。ゴーリキイの『どん底』（1902年）とともにプリージョフの本の復刻は、この時期の読者人たちの関心の所在を知る手がかりを与えてくれる。また『カマ・ヴォルガの言論』という雑誌の書評では「こんな面白い本の中身を伝えることは到底できやしない。とにかく読んでみなければわからない。プリージョフの本は現在ではたいへんな稀覯書である。だからこの本がカザンの〈歴史文庫〉として出版されたことを心から大歓迎するものである」と賞賛している。歴史家アレクサンドル・キゼヴェツェルも『ロシア報知』（1913年第117号）でアフナーシェフの『伝説集』やプリージョフの著作のような「文献学的稀覯書」の復刻に取り組んだ「若い力」社は「すべての祖国史愛好家たちへのきわめて価値ある貢献」をなしたと絶賛している。また歴史雑誌『過去の声』（1915年第1号）はゴチエの書評を載せている。それによれば、プリージョフの仕事は、彼と同時代人のソロヴィヨフ、チチューリン、カヴェーリンといった一流の歴史家たちの業績と比べて見劣りがするとはいえ、それ自体ひとつのロシア史観として興味深いものがあるし、また風俗にかんする幅広い資料集としても価値があるという。またプリージョフの本は歴史研究というよりも一種の問題提起の書であり、そのいわんとするところは、居酒屋とは民衆にとっての交流・討論の場であり、民衆の自主性が培われた場所であったが、それらは時々の権力によって弾圧されてきたということである、と解説している（Готье, 1915: 314）。また『居酒屋の歴史』第2版には、コチェルギン編の引用文献目録が付録としてあり、4枚の挿絵も新たに加わっていることも指摘しなければならない。

20世紀初頭になると、このようなプリージョフの著作の復刻とならんで彼の同時代人たちの回想が出版され、ほんの僅かとはいえ彼についての記憶が書きとどめられることになる。文学史家アレクサンドル・ヴェセロフキイとその弟アレクセイは、ともにプリージョフの知人だったが、アレクセイは1909年の『ストロジェンコ記念論集』のなかで、プリージョフを「学問への無限の傾倒と民衆への愛」という二つの変わらぬ情熱をもって人間だと評していた（Базанов, 1974: 401）。同じ論文集にはリンニチェンコの回想も掲載され、プリージョフとストロジェンコとの友情のいきさつについて知ることができる。それによると、1863年に二人は出会い、64年にストロジェンコがシェークスピアについての連続公開講演を行ったとき、プリージョフは友人のアレクサンドル・コトリアレフスキイとともに率先して賞賛の拍手をおくり、同じ年の『モスクワ県報知』誌第3号に「シェークスピアについてのストロジェンコ氏の講演」と題する文を寄せ、そのなかでもしこの講演者がイギリスで研究を進めるならばさらに実りあるものになろうと書いた。そしてストロジェンコの父親がこの一文を目にし、息子を留学させる決心をしたという。のちにシェークスピア学者として有名になるストロジェンコのデビューのかけに、プリージョフの尽力があったのである。ストロジェンコがこの恩義を一生忘れなかったことは、ヒンの手紙からも明らかである。また留学を認められたストロジェンコが、礼を言うためにプリージョフの職場を訪れた時のエピソードも記されている。プリージョフが出勤するさいに部下たちと一緒にロシア正教会の儀式のパロディを演じたり、出勤早々にリュムカ（小杯）での乾杯をしていることなど、彼の人柄だけでなく当時の下級官吏の風紀を想像する上で興味深いものがある（鈴木, 1986: 45-46; Козьмин, 1927: 170）。

またジャーナリストのリプロヴィチは、出版業者ヴォリフを中心に往時の思い出を綴った『書

物の哨所にて』(1916年)で「居酒屋業の歴史家」と題する章をもうけプリージョフとヴォリフとの出会いのエピソードを伝えている(鈴木, 1986: 50, 61; Либрович, 1916: 58)。伝記的事実の部分は『告白』を利用しているが、自称宿無しの「汚い」風体の四十がらみの男が、自分が書いたという原稿「居酒屋の歴史」を売り込みに来たというエピソードや「彼は絶対に才能ある作家であり、民衆の世界についての大博識家であったが、作家たちとのつきあいからは、つつまじやかに距離をおいていた」という指摘はリプロヴィチ自身のものであろう。またプリージョフに有罪判決が下されて以降に、ヴォリフが当局から『居酒屋の歴史』を許可無しに出版しない旨の誓約をさせられたうえ、さらにヴォリフ社の倉庫が火災に見舞われた時、同書の残りの部数が焼失したため、この初版本が稀覯書となってしまったという事情も紹介している(Либрович, 1916: 61)。

ネチャーエフ派の同志で学生殺害事件の共犯者でもあったピョートル・ウスペンスキイの妻アレクサンドラの回想(1922年)も、プリージョフの人柄の別の面を教えてくれている。彼女の回想からは、ネチャーエフのグループにプリージョフという「新しい知り合い」が入ってきたこと、彼は若い仲間たちが初めて目にした「作家」であったこと、そして彼がいつも酔っぱらっていて「不愉快な」印象を彼女に与えていたこと、また「おしゃべり」で「自慢話ばかり」して、若者たちを「見下した」ような態度をとっていたということ、などを知ることができる(Базанов, 1974: 396-397; Успенская, 1922: 31)。

このアレクサンドラの妹で、のちにペテルブルグ市長を銃撃することで革命家として有名になり、マルクスへの手紙でも知られているヴェーラ・ザスーリチの『回想』(1931年)では、プリージョフは次のように描かれている。「プリージョフは、この若い仲間たちのなかではひじょうに変な人だった。四十がらみで『聖なるロシアの乞食』や『居酒屋の歴史』の著者であり、民衆風俗の熱心な研究者だった彼は、この当時たいへんな酒飲みで、しらふの時でも神経をやられた病人ではないかという印象を多くの人たちに与えていた。彼がネチャーエフと知り合うのは、ウスペンスキイをつうじてであった。彼に、ネチャーエフは自分の生い立ちを次のように語った。すなわち自分は17歳になるまで読み書きを知らずに看板をかいていたが、19歳の時にはもう大学で講義を聴き、カントの『純粹理性批判』をそらで引用できるまでになった、と。この話を聞いてプリージョフはネチャーエフに有頂天になったのである。《40年このかた生きてきたが、こんなエネルギーに未だかつて出会ったことがない!》——とプリージョフは感激し、このエネルギーの源はネチャーエフの出自ゆえのものだと考えていた。《いったん少しでも恵まれた条件のもとに置かれるならば、民衆の子らはなんとまあ凄惨な奴になるものだ!》——と彼は断言していた」(Базанов, 1974: 416-417)。

17年革命をはさんで同時代人の回想のなかにあらわれているプリージョフ像の重心は、博学な歴史家・作家というイメージから革命家グループのメンバーというイメージへと移っていくように思われる。それとともに文壇から距離を置いていた彼の独特な人柄が伝えられるようになったといえる。

革命前の運動史研究の草分け、ボリス・コジミンは、1927年の論文「書簡にみるネチャーエフ派プリージョフ」で、ヒンを介して伝え残されたストロジェンコ宛ての書簡(1881~1884年の6通)を活字化している。そこからは、プリージョフが流刑後で極度の窮乏生活を余儀なくされたこと、それにもかかわらず学問への情熱を失わなかったことがわかるという。またシベリア時代に書かれたプリージョフの草稿類について、彼の死後にペトロフスキイ工場の鉱山技

師がストロジェンコに宛てた手紙のなかで自分が預かっていると書いていることも明らかにされた。だがコジミンはもはやそれらは失われてしまったにちがいないと推測している（Козьмин, 1927 : 117）。

1930年代にプリージョフの仕事の再評価を試みたのは、M. アリトマンである。彼は、31年に論文「プリージョフとドストエフスキイ」を発表し、ドストエフスキイとプリージョフが同じ慈善病院で生まれたことに注目し、『悪霊』の登場人物トルカチェンコの形象がプリージョフに由来するという仮説を提示し、同じ年に今日でもなお価値ある伝記『イヴァン・ガヴリロヴィチ・プリージョフ』を上梓した。さらに34年にはプリージョフの著作集『オーチェルキ・論文・書簡』を編集出版した。そこには『居酒屋の歴史』こそ収録されていなかったが、それ以外の主要著作、手稿『告白』、手紙が活字化され、アリトマンによる序文と解説・註とともに詳細な著作目録も収録されている。それによれば、プリージョフが生前に発表した著作は50点にのぼり、それらに対する書評も20点にも達していた。また同著作集には1922年にオクスマンがペテルブルグ検閲委員会のアルヒーフ資料のなかから発見した論文「モスクワ大学の動乱時代と盗人ども」も含まれている。

プリージョフの文献発掘の第二の波の端緒となったのが、中世文学史家プシュカリョフの1950年の論文「失われたかに見えたプリージョフの手稿フォンド」（『ソビエト民族学』第1号）である。27年にコジミンが推測したように、シベリア時代のプリージョフの手稿類は散逸したものであると思われていたが、どういうわけかそれらは風俗研究家シチュキンのコレクションに含まれ、1905年に歴史博物館に寄贈されていたのである。1941年の同館の疎開のさいに内務省中央国立文学アルヒーフに移され、そこで「1860年代のフォークロア学」をテーマに調査をしていたプシュカリョフによって1948年に発見されたのである。彼によれば、そこには民間信仰にかんする「魔女」「自然と人間の詩的関係の光の側面」「人類史における犬」などと題された草稿類、『居酒屋の歴史』の草稿、セクト・異端・分離派にかんするもの、また「11～18世紀の古文獻にみる小ロシアの風俗」などが含まれていた。そのなかで最大の分量をもつのが「ルーシの公民」と題するほぼ500丁もの草稿である。これは、デカプリストから西欧派、スラヴ派にいたるまでの「公民意識（グラジュダンストヴェンノスチ）」という概念を検討したものである。また「モスクワ=タタール主義の王国」、その異稿としての「モスクワ=ビザンツ主義とタタール主義の王国」などからは、彼が民衆史からさらに国家史をもふくめた独自のロシア史を構想していたことがうかがえるという。また注目すべきは、流刑地での調査にもとづく「ペトロフスキ工場とデカプリストたち」や「シベリア覚書」「ザバイカルの自然」など野のフィールドワーカーとしての彼の真骨頂をあらわす作品群であるという。プシュカリョフは、これら1880年代の遺稿を紹介することで「学者=革命家」として筋を曲げなかったプリージョフの生き様を高く評価した（Пушкарев, 1950 : 184-187）。

これらのシベリアでの遺稿を利用して、プシュカリョフは、1954年に「プリージョフの著作における教会および聖職者批判」（『宗教と無神論の諸問題』第2集）や、56年に「シベリアのデカプリストについてのプリージョフの知られざる研究」（『文学遺産』第60巻第1冊）を発表している。ちなみにプシュカリョフは、自著『祖国史に関するロシアの文書史料の分類』のなかで、史料批判のためには、史料の内容とそこに反映されている社会的文脈とともに、作者の個人的好み、関心・共感の所在をも検討する必要があると指摘し、後者の側面が強く現れている史料としてプリージョフのテキストを例に挙げている（Пушкарев, 1975 : 89）。

プリージョフの研究テーマのひとつは「小ロシア」すなわちウクライナの民衆の歴史であった。この点に注目したのが、筆者未見であるが、キエフで発表されたマズルケヴィチの論文「60年代ロシアの革命家プリージョフの評価におけるシェフチェンコ」(1957年)と著書『プリージョフ、文学上のロシア-ウクライナ関係系より』(1958年)であろう。

科学アカデミー歴史研究所が編纂した『ソ連における史学史概観』第2巻(1960年)の「民族学」の項目では、1860年代の「最も先駆的な資料収集家」としてИ.フチャコフとプリージョフの名前が挙げられている。また『ソ連における史学史。10月以前の時代』(1965年)でもプリージョフに言及している。

1960~70年代にかけて精力的にプリージョフ研究を進めたのがレニングラードのツァムタリである。彼は論文「プリージョフ=歴史家=革命家」(1954年)や「プリージョフの未刊の書『ルーシの公民』」(1964年)を発表するとともに、『ソビエト歴史百科事典』第11巻(1968年)での「プリージョフ」の項目を執筆している。彼は、自著『19世紀60-70年代のロシア史学における民主的路線の概観』(1971年)で、一つの章をプリージョフのために割いている。ツァムタリの問題意識は、ゲルツェンやチェルヌィシェフスキイといった巨人の陰にかすみがちなこの時代の民衆派歴史家たちの群像、すなわちエリセエフ、シェルグノフ、シチャポフ、フチャコフらの業績に光を当てることであった。彼は、60年代のアカデミズムの歴史家たち、ポゴーチン、ソロヴィヨフ、コストマーロフらと比較してプリージョフの歴史観の独自性を浮き彫りにしている。

他方、文学研究の分野でプリージョフに注目したのがトロフィモフである(鈴木、1986:58)。彼は「学者=革命家の知られざる手稿」(『ロシア文学』1966年第3号)で、シチュドリンやレスコフがプリージョフの作品を高く評価したことなど紹介し、歴史博物館手稿部での240丁もの未発表草稿の発見を報告している。彼の紹介の中で注目すべきは、スラヴ派史学を批判した「ロシアにおける歴史学」、中世の迷信にかんする「魔法使い」のほか、女性史のテーマにかんする「大ロシアの民衆風俗史」、古ルーシの非歴史的潮流の歴史的概観や多数の未発表書簡、書評草稿類などである(Трофимов, 1966)。

またバザノフ著『ロシア革命的民主主義者と民衆学』(1974年)が、先行研究を丹念におさえつつ、講壇史学から排除されながらも、民衆生活の闇の側面に光を当てようとした在野の学者プリージョフの業績を適切にまとめている。バザノフが提起している「民衆学」(народзнанье)という用語は、この時代の民衆についての学的知識が民衆の解放という実践的な課題(意識)と不可分にむすびついていたことを強調するために考案されたものであり、そのことによって既成の「民俗」(フォークロア)という概念そのものを拡張することをめざした(Базанов, 1974:6-7)。さらに1975年には、プシュカリョフが、論文「プリージョフによるシベリアのデカプリスト論」で、中央国立文学芸術アルヒーフで発見された新資料の紹介をおこなった。また同じ75年には、ソビエト時代の最も権威ある『ソビエト大百科事典』において、「プリージョフ」の項目(第21巻)がたてられた。1980年代に関しては、筆者の調査は不十分なものと言わざるをえない。『封建主義と資本主義の時代におけるソ連極東史』(1991年)において、シベリアのデカプリストに関する資料としてプリージョフ著『ペトロフスキイ工場におけるシベリアのデカプリスト』(1985年)が引用されていることを見いだしたただけである。おそらく80~90年代にかけて未公刊資料の刊行が徐々に準備されていったものと思われる。ただ、気になることは、「ソ連邦」崩壊以降、高度に学術的な書籍が刊行されにくい状況が生じているということである。

ある。

#### 4. 1990年代初頭の『居酒屋の歴史』の復刻版その他について

1990年代に復刻された『居酒屋の歴史』には2種類の版がある。一つは1991年のモスクワの新興出版社によるものである。発行者による原書に関する言及はないものの、1914年の第2版と比較してみると、それをもとにしていることは明白である。また1918年まで使われていた古い正書法による活字そのままにリプリントしている。また第2版にある挿絵のうち2葉が再録されている。表題のロゴまでそっくりであるにもかかわらず、「第2版」という表記と出版社の名前の部分が空白になっている。奥付に記されている発行部数70,000部というのは相当な量である。90年代初頭に発行された専門書のほとんどが5,000~200部であることを考えれば、この版は幅広い読者を狙ったものであることは明らかである。ソビエト時代の法律にしたがって定価が12ルーブルと裏表紙に記されているが、実際の価格は60ルーブルであった（1993年5月モスクワで同書を購入した時には1ドル=1,000ルーブル）。1992年の価格自由化以降、ものすごいハイパー・インフレが進行し、それまであらゆる「商品」に表示されていた「定価」が一切無意味になったことは周知の通りだが、書籍もその例外ではない。

『居酒屋の歴史』に話をもどしていえば、1992年にモスクワの「諸民族友好」出版による正書法の活字による別の版が、50,000部発行された。こちらのほうは表題に『ロシアにおける居酒屋の歴史』とあるものの、「居酒屋の歴史」以外に「聖なるルーシの乞食」「モスクワの26人の…」がアリトマンの34年の序文「イヴァン・ガヴリロヴィチ・プリージョフと彼の文学遺産」とともに収録されている。これによって90年代の読者は作者プリージョフについての知識を得ることができるようになった。また表紙は、出典不明ながら、中世における飲酒の風景をモチーフにしたルポーク風の彩色線画で飾られている。原本についての言及がないのも1991年版とおなじである。

ついでながら、興味深いのは1996年にモスクワで出たプリージョフの『モスクワの26人の予言者・瘋癲行者・馬鹿女と馬鹿男たち』である。モスクワでの実勢価格は不明だが、発行部数は3,000部とある。ルリエによる序文「イヴァン・プリージョフの生涯と著作」とアリトマンによる注釈がつけられている。原本は、アリトマン編集による1934年の著作集である。見逃してならない点は、表題からも明かなように同書1865年の初版の表題名にあった「偽—予言者」「偽—瘋癲行者」という言葉から「偽」という接頭辞が除かれていることである。その理由は、34年のアリトマンの編集に求めることができよう。アリトマンは、34年版の注解に次のように書いている。

「[...] 前者の著作は、単行本として1865年に『26人のモスクワの偽—予言者、馬鹿女と馬鹿男たち』という題名で出版された（付録として掲げたこの版の表紙<sup>3)</sup>を参照せよ）。この題名は、かならずしもその内容と完全に一致しているとはいえない。というのも、そこには、モスクワの《予言者と瘋癲行者たち》以外に、一連の地方の人たちも描かれており、最後の6人の《馬鹿女と馬鹿男たち》は、みなヴォロネジ地方の人たちだからである。だが、この不正確さは二義的なものである。より本質的なのは、表題（および本文）への《偽》という言葉の挿入である（《偽—予言者たち》、《偽—瘋癲行者たち》）。このことは、本質的に作者の思想をゆがめ



るものである。すなわち、プリージョフが暴露しているこれらの《偽—予言者たち》と《偽—瘋癲行者たち》以外に、更になにかある《ほんとうの》予言者や瘋癲行者たちがいることを彼が認めているという印象を与えかねないからである。ところが彼らに対してプリージョフはそのような態度をとっていないのである。ちなみに実際には、この〈偽〉についてプリージョフには罪がないのである」。アリトマンによれば、プリージョフ自身の書簡その他、また同書所収の諸論稿が最初に載った雑誌そのものには、「偽」という接頭辞ぬきの「予言者たち」、「瘋癲行者たち」と記されており、検閲のもとでゆがめられた「作者の実際の意志」を尊重して、彼が「偽—」を除いた「表題」に訂正したという。また、本文においても初出雑誌にしたがって、「見せかけの」「偽物の」「偽の」といった接頭辞を削除したと述べている(Альтман, 1934: 433-434)。

## 5. むすびにかえて

本稿は、暫定的ながら、さしあたり現時点で、プリージョフに関する文献を概観することにより、その多面的性格、あるいは諸ディシプリンを横断するような性格をある程度まで明らかにした。今後、非ロシア語文献およびスラヴ学、地理学、民族学・民俗学などの分野で、とくにさらなる調査が必要である。同時に、これらの文献の「分類」についても、今後、再検討する余地があると思われる。

## 註

- 1) 中村喜和氏の研究が、日本でのプリージョフ研究の出発点であるとすれば、鈴木淳一氏の研究はプリージョフの伝記的叙述の試みである。これとは別に、白石氏は居酒屋経営との関連でプリージョフの『居酒屋の歴史』に言及している。下里の1995年の論文は、1860年代初頭の論壇との関連でプリージョフの位置を明らかにしたものであり、1996年の論考は、ドストエフスキイとの関連で一つの仮説を提示したものである。
- 2) 下里俊行「カラコーゾフ事件とロシアの社会運動(1866年)」『一橋論叢』第113巻第2号、1995年、59頁を参照。
- 3) ところが、同じ34年の著作集の32頁に掲げられている、65年版の表紙のフォトコピーには『26人のモスクワの偽—予言者、偽—瘋癲行者、馬鹿女と馬鹿男』とある。

## 引用・参考文献

- 1976 : 中村喜和「資料紹介『モスクワの二十六人の偽予言者...』その他」、『一橋論叢』第76巻第3号。  
1986 : 鈴木淳一「永遠の失敗者——プリージョフ略伝」、『文化と言語』(札幌大学)第19巻、第1号。  
1994 : 白石治朗「ウォトカとロシア社会」、野崎直治編『概説西洋社会史』有斐閣選書。

- 1995 : 下里俊行「聖なるロシアの『乞食』—『大改革』時代の慈善論争」, 坂内ほか編『ロシア聖とカオス』彩流社.
- 1996 : 下里俊行「ドストエフスキイとプレイジョフ」, 『ドストエーフスキイ広場』第5号.
- 1865 : Прижов, И.Г. «26 московских лже-пророков, лже-юродивых, дур и дураков». М.\*(см.:Прижов, 1934:32)
- 1868 : Прижов, И.Г. «История кабаков в России», Вольф, М.
- 1908 : Прижов, И.Г. “Исповедь”, «Минувшие годы», №2.
- 1909 : Веселовский, А.Н. “Из ранних лет”, «Памяти Н. И. Строженко», М.
- [1913] : Прижов, И.Г. «Нищие на Святой Руси», Изд. 2-е, Издательство «Молодые силы». [Казань.]
- [1914] : Прижов, И.Г. «История кабаков в России в связи с историей русского народа», Изд. 2-е, Издательство «Молодые силы». [Казань.]
- 1914 : Аничков, Е.Г. «Язычество и древняя Русь», СПб.\*
- 1915 : Готье, Ю. “Критика и библиография. [рец. на кн.:] И.Г. Прижов, История кабаков в России в связи с историей русского народа. Изд. 2-е. Издательство «Молодые силы». Ц. 2р.”, «Голос минувшего», №1.
- 1916 : Либрович, С.Ф. «На книжом посту», Вольф, Пг.–М.
- 1922 : Успенская, А. “Воспоминания шестидесятицы”, «Былое», №18.
- 1924 : Деникер, И.Е. “Воспоминания”, «Каторга и ссылка», №4.
- 1927 : Козьмин, П.Б. “Начаевец И. Г. Прижов в его письмах”, «Каторга и ссылка», №33.
- 1931 : Засулич, В. «Воспоминания». М.\*
- 1931 : Альтман, М. “Прижов и Достоевский”, «Каторга и ссылка», №8-9.
- 1932 : Альтман, М. “И. Г. Прижов”, «Каторга и ссылка», №6.
- 1932 : Альтман, М. «Иван Гаврилович Прижов», Изд. Общества полит-каторжан, М.
- 1934 : Прижов, И.Г. «Очерки, статьи, письма», Academia, М.–Л.
- 1934 : Альтман, М. “Иван Гаврилович Прижов и его литературное наследие”, Прижов, И.Г. «Очерки, статьи, письма», Academia, М.–Л.
- 1950 : Пушкирев, Л.Н. “Рукописный фонд И.Г. Прижова, считавшийся утерянным”, «Советская этнография», №1.
- 1954 : Пушкирев, Л.Н. “Критика церкви и духовенство в трудах И.Г. Прижова”, «Вопросы религии и атеизма», Вып. 2. М.
- 1954 : Цамутали, А.Н. “И.Г. Прижов-историк-революционер”, «Вестник ленинградского государственного университета», Вып. 1. Серия истории, языка и литературы, №2.
- 1956 : Пушкирев, Л.Н. “Неизвестная работа И.Г. Прижова о декабристах в Сибири”, «Литературное наследство», Т.60, кн.1.
- 1958 : Мазуркевич, А.Р. «И.Г. Прижов. Из истории русско-украинских литературных связей», Киев.\*
- 1960 : «Очерки истории исторической науки в СССР», Т.2, М.
- 1964 : Цамутали, А.Н. “Неизданная книга И.Г. Прижова «Граждане на Руси»”, «Исследования по истории отечественного источниковедения. Сборник, посвященной проф. С.Н.Валку», М.-Л.\*
- 1965 : «История исторических науки в СССР. Дооктябрьский период», М.\*
- 1966 : Трофимов, И. “Неизвестные рукописи ученого-революционера”, «Русская литература», №3.
- 1968 : Цамутали, А.Н. “Прижов, Иван Гаврилович”, «Советская историческая энциклопедия», Т.11, М.
- 1971 : Лейкина-Свирская, В.Р. «Интеллигенция в России во второй половине XIX века», Мысль, М.
- 1971 : Цамутали, А.Н. «Очерки демократического направления в русской историографии 60-70-х годов XIX в», Л.
- 1974 : Базанов, В. «Русские революционные демократы и народознание», Л.
- 1975 : Пушкирев, Л.Н. “И.Г. Прижов о декабристах в Сибири”, «Ссылка и каторга в Сибири (XVIII-

- начало XX в.)», Наука, Новосибирск.
- 1975 : «Большая Советская энциклопедия», Т.21, М.с.173.
- 1975 : Пушкарев, Л.Н. «Классификация русских письменных источников по отечественной истории», Наука, М.
- 1977 : Цамутали, А.Н. «Борьба течений в русской историографии во второй половине XIX века», Л.
- 1985 : Прыжов, И.Г. «Декабристы в Сибири на Петровском Заводе», М.\*
- 1991 : «История Дальнего Востока СССР в эпоху феодализма и капитализма (XVII в.-февраль 1917 г.)», Наука, М.
- 1991 : Прыжов, И. «История кабаков в России», Репринтное воспроизведение, book chamber international, М.
- 1992 : Прыжов, И.Г. «История кабаков в России», встп. ст. М. Альтмана, «Дружба народов».
- 1996 : Прыжов, И. «26 московских пророков, юродивых, дур и дураков и другие труды по русской истории и этнографии», Комментарии М.С.Альтмана под редакцией Л.Я. Лурье, Вступительная статья Л.Я. Лурье, «ЭЗРО», СП., «Интрада», М.

(\*は筆者未見をさす)

## Библиографические этюды по авторе книги «История кабаков в России» И. Г. Прыжову:

Тосиюки СИМОСАТО\*

### АВТОРЕФЕРАТ

Иван Гаврилович Прыжов (1827-1885) известен не только как нечаевец, но и как историк и этнограф. Сфера его интересов была широка. Говорят, что он — люмпен-интеллигент, бедняк, алкоголик и т.д. Последние труды И.Г. Прыжова по истории и этнографии Сибири считаются драгоценными.

Эти этюды посвящены тому, что у него произведений есть много вопросов спорных по библиографии и литературоведению.

---

\* Division of Social Studies : Department of Humanities and Social Science